

高速戦艦「赤城」2

「赤城」初陣

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	ルソンの襲撃者	9
第二章	トラックの甲標的	37
第三章	アジア艦隊の選択	71
第四章	パラオ強襲	99
第五章	「赤城」咆哮	149
第六章	開かれた航路	205

・ 沖ノ鳥島

マリアナ諸島

サイパン島
テニアン島
グアム島

太平洋

トラック環礁

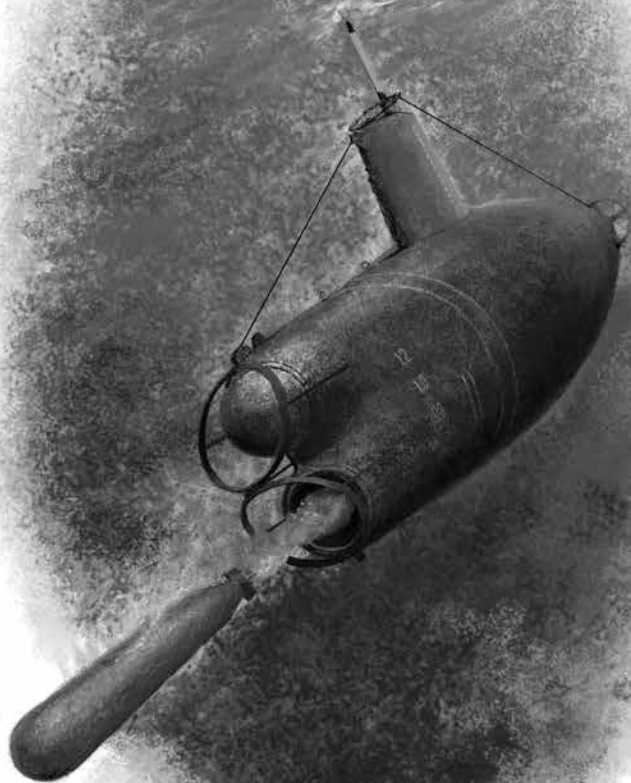
内南洋要域図



パラオ諸島要図



アンガウル島



高速戦艦「赤城」2

「赤城」ういじん初陣

第一章
ルソンの襲撃者

1

「索敵機より受信!」

第二艦隊旗艦「鳥海」の艦橋に、通信參謀中島

親孝少佐が報告を上げた。

昭和一六年一月二日。

フィリピン・ルソン島の北西部に位置するリングアエン湾の湾口付近だ。

「鳥海」の周囲には、丈高い艦橋と太く長い主砲を持つ第三戦隊の戦艦「金剛」「榛名」や、「鳥海」と共に第四戦隊を編成する姉妹艦「摩耶」、第五戦隊の重巡洋艦「羽黒」「足柄」、第四水雷戦隊の軽巡洋艦「那珂」と駆逐艦一二隻が展開している。

開戦時の第二艦隊旗艦「愛宕」は、一〇月二五日のルソン沖海戦で損傷したため、司令長官近藤信竹中将は「鳥海」に将旗を移すと共に、艦隊の再編成を実施していた。

「敵味方不明ノ巡三、駆八見ユ。位置、(サンティアゴ島) (リングアエン湾西端の小島) ヨリノ方位二四〇度、五〇哩。二二三六(現地時間二二時三六分)。「足柄」一号機の報告です」

「来たか!」

中島が報告電を読み上げると、艦橋の空気が張り詰めた。

現在の時刻は二三時一七分(現地時間二二時一七分)。索敵機が報告電を打ってから、四一分が経過している。

発見された艦隊が、最大戦速で突進しているとすれば、二〇哩は進んだ計算だ。敵は、リングアエン湾口まで三〇哩と迫ったことになる。

近藤は、湾内に視線を向けた。

この日、リングアエン湾には、日本陸軍第二五軍が上陸し、海岸に橋頭堡を築きつつある。

上陸に際しては、米軍の激しい抵抗が予想されたが、案に相違して海岸での反撃はなく、第二五軍は

無血で上陸したのだ。

「ルソン沖海戦における米アジア艦隊の敗北が、米陸軍部隊の戦意を喪失させたのだろうか」

と、近藤は考えている。

開戦時、米アジア艦隊には九隻もの戦艦が配備され、ルソン島周辺に睨みを利かせていた。

それらの中には、世界最強の火力を誇るサウス・ダコタ級戦艦六隻が含まれており、帝国海軍の戦艦が束になっても、かなわぬのではないかとさえ思われた。

ところが日本軍は、機動部隊と基地航空隊の航空攻撃、及び第二艦隊の夜襲によつて、敵戦艦二隻を撃沈し、四隻を撃破した。

米アジア艦隊の戦艦のうち、三分の二を戦列から落伍させたのだ。

海戦終了後、アジア艦隊は、母港としていたマニラ湾のキャビテから姿を消している。

「アジア艦隊の残存部隊が、第二五軍の上陸を阻止

するため、リングエン湾に突入して来る可能性がある」

第二艦隊はこのように考えていたが、その危惧は、日没後に現実のものとなったのだ。

巡洋艦と駆逐艦を合わせて一一隻の小部隊だが、上陸直後の第二五軍にとつては、大きな脅威だ。

将兵はほとんど上陸を終えたが、補給物資の揚陸はまだ終わっていない。

輸送船を撃沈され、補給物資を喪失すれば、マニラへの進撃は不可能になる。

「敵艦隊の湾内突入を、断固阻止する。船団にも、上陸部隊にも、指一本触れさせぬ」

「やりますか、長官！」

宣言するような近藤の言葉を受け、参謀長白石万隆少将が意気込んだ様子で叫んだ。

八日前、米軍最強のサウス・ダコタ級戦艦と戦ったときの闘志が甦ったようだ。

近藤は、野太い声で下令した。

「合戦準備。夜戦に備え！」

2

アメリカ合衆国海軍第一四任務部隊は、旗艦「ヘレナ」を先頭に単縦陣を組み、サンティアゴ島の北西岸から北岸へと回り込みつつあった。

合衆国が中国の国民党政府と協定を結んで、軍を駐留させていた海南島に、アジア艦隊から派遣されていた分遣隊だ。

開戦前は南シナ海封鎖の一翼を担い、海南島周辺の警備に当たっていたが、一〇月二五日のリングエン湾海戦、マニラ湾口海戦（両者とも、ルソン沖海戦の米側公称。米海軍では二つの海戦と認識している）により、フィリピンを巡る情勢は一変した。

南シナ海の海上交通路を遮断し、日本を締め上げるはずが、逆に合衆国領であるフィリピンが脅かされている。

TF 14は日本軍のルソン島上陸を阻止すべく、海南島三亜港からリングエン湾に急行したのだった。

（合衆国艦隊が、劣勢を強いられるとは）

TF 14司令官ボブ・ルーブ少将には、その悔しさがある。

アジア艦隊司令長官ウィルソン・ブラウン大將は、「連合艦隊など、アジア艦隊に配備された九隻の戦艦だけで圧倒できる」と豪語しており、ルーブもその言葉を信じた。

そのアジア艦隊の堂々たる勇姿は、マニラ湾から消えた。ルソン島を放棄して、フィリピン南部に避退したのだ。

サンティアゴ島に潜む沿岸監視部隊の報告によれば、船団を護衛している日本艦隊は、金剛型の戦艦が二隻に重巡が四隻、駆逐艦が一〇隻以上だ。

TF 14の兵力は、軽巡洋艦三隻、駆逐艦八隻。

軽巡は一五・二センチ三連装砲五基を装備するセントルイス級、ブルックリン級であり、二〇・三七

ンチ砲装備の重巡が相手でも互角に戦える艦だが、戦艦が相手では分が悪過ぎる。

「軽巡三隻が、危険な役を引き受ける以外にない」

ループは、幕僚たちに作戦方針を説明している。

軽巡が囷となつて戦艦、重巡を引きつけ、駆逐艦八隻を突入させるのだ。

艦体が小さく、足が速い駆逐艦なら、闇に紛れて突入できる可能性がある。

手持ちの戦力で、戦艦二隻を擁する日本艦隊に立ち向かうには、他に方法がなかった。

「レーダーに反応。方位一五度、一万七〇〇ヤード！」

時計の針が〇時を回った直後、レーダーマンから報告が上げられた。

今年装備されたSG対水上レーダーが、日本艦隊を捉えたのだ。

「全艦、主砲左砲戦」

「サンティアゴ島を背にして進め」

ループは、二つの命令を下した。

陸地を背にすることで、影の中に隠れるのだ。

マニラ湾口海戦では、戦艦「インディアナ」がこの手を用い、日本艦隊を一時的に後退させたとの情報もある。

ただし、この日の月齢は一四。夜空からは、煌々たる満月の光が海面に降り注いでいる。

この気象条件で、島影に隠れる戦術がどこまで有効かは分からなかった。

「面舵五度」

「面舵五度！」

「ヘレナ」艦長ギルバート・C・フーバー大佐が命じ、航海長ジェラルド・ローリングス中佐が操舵室に指示を送る。

「ヘレナ」が艦首を僅かに右へと振り、レーダーマンが「ボイス」「フィラデルフィア」面舵」と、僚艦の動きを報せて来る。

「敵艦、接近します。方位一〇度、距離一万四〇〇

「ヤード」

「艦長より砲術、敵艦は視認できるか？」

レーダーマンの新たな報告を受け、フーバーが砲術長ロバート・ヘイズ中佐に聞いた。

本国ではレーダー照射射撃の開発が進められているが、まだ実用段階には達していない。

レーダーの用途は目標の発見だけであり、砲撃は従来の光学照準に頼っている。

「視認できません」

「了解した」

ヘイズの答えに、フーバーはごく短く返答する。

「ヘレナ」の前甲板では、三基の一五・二センチ三連装砲塔が左舷側に向けられ、九門の砲身に仰角がかけられている。

一発当たりの破壊力では、戦艦の三五・六センチ主砲、重巡の二〇・三センチ主砲に及ばないが、発射間隔は六秒という速射性を誇る。

夜間の近距離砲戦では、速射性能がものを言う。

「ヘレナ」以下の一一隻は、サンティアゴ島の北岸に沿って前進して行く。

彼我共に、発砲はない。

満月の光があるとはいえ、互いに視界の範囲外だ。「ヘレナ」のレーダーだけが、日本艦隊の動きを探知している。

「対空レーダーに反応。左七五度、高度三五〇〇フイート」

今度は、C X A M対空レーダーを担当するレーダーマンが報告を上げた。

「撃ちますか？」

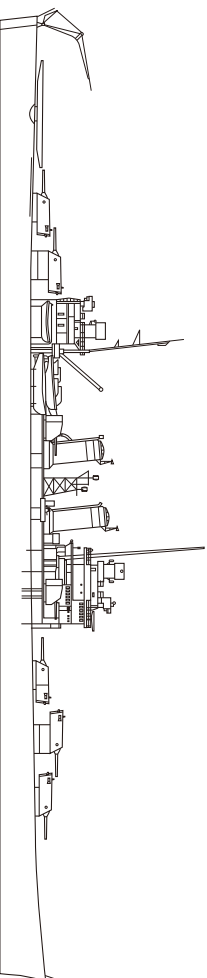
「様子を見る。各艦にも、発砲を控えるよう伝えよ」
参謀長ロニー・ジェラルディン中佐の問いに、ループはかぶりを振った。

数分後、爆音が聞こえ始めた。

機数は一機だけのようだ。日本艦隊から放たれた観測機かもしれない。

爆音が、「ヘレナ」の頭上を左から右に通過する。

アメリカ海軍 CL-50 軽巡洋艦「ハルカ」



全長	185.5m
最大幅	18.8m
基準排水量	10,000トン
主機	蒸気タービン 4基/4軸
出力	100,000馬力
速度	33.0ノット
兵装	15.2cm 47口径 3連装砲 5基 151mm 12.7cm 38口径 連装両用砲 4基 81mm
乗員数	20mm 単装機銃 12丁 888名
同型艦	CL-49セントルイス

米国はニューヨーク海軍縮約締結の段階で「ダニエルズ・プラン」に基づいた戦艦10隻、巡洋戦艦6隻からなる強大な艦隊をすでに完成させていた。一方で、この戦艦部隊の維持には莫大な費用が掛かることから、巡洋艦、駆逐艦など他の艦種に宛てられる予算は圧縮せざるを得なかった。

本艦はセントルイス級軽巡洋艦の2番艦で、日本の「最上型巡洋艦」に対抗すべく開発されたフルツクリン級の準同型艦だが、いまだ本艦を含め、同型艦2艦のみの建造に留まっている。フルツクリン級は、被弾の際に弱点となる航空兵装を艦尾の集中防衛区画外に配置するなど、徹底的に艦体防衛を重視した設計で知られるが、本級もその設計を踏襲している。そのうえで機関の配置をシフト配置に変更し、より抗堪性を高めている。

対水上レーダー、対空レーダーも装備しており、警戒監視から対空防衛まで、あらゆる任務を担える万能艦と言われている。

一旦遠ざかったかと思うと、また戻つて来る。

T F 14の所在を疑い、位置を突き止めようとして
いるようだ。

「敵機の高度下がります。現在、三〇〇〇フィート！」

レーダーマンが緊張した声で報告したとき、他艦
が行動を起こした。

後部から砲声が届き、後部見張員の「『ボイス』
発砲！」の報告が、それに続いた。

「ボイス」の発砲は、一発だけに留まらない。砲声
は、二度、三度と連続する。

右舷側——サンティアゴ島の上空に、一二・七セ
ンチ両用砲弾の爆発光が見える。

やがて、一際大きな爆発光が閃き、爆炎が周囲の
闇を吹き払った。

炎の塊が地上に落下し、周囲が赤々と染まる。

「ボイス」が撃墜した敵機の火災炎だ。
ループは、左舷側に視線を転じた。

日本艦隊も、T F 14が島影に隠れていることは察
知したはずだ。今にも、戦艦、重巡の主砲が火を噴
くかもしれない。

「新たな敵機が接近。左四〇度、及び一五〇度。高
度三五〇〇フィート！」

「敵艦接近。距離一万一〇〇〇ヤード！」

二つの報告が続けざまに飛び込んでから一〇秒ほ
どが経過したとき、敵機の爆音が迫った。

「ヘレナ」の頭上を右方に抜けた直後、右舷上空の
二箇所に青白い光源が出現した。

敵機が、吊光弾を投下したのだ。

おぼろげな光は、「ヘレナ」の右舷側から差し込
んでいる。敵艦隊には、「ヘレナ」の艦影が、影絵
のように浮かび上がって見えるはずだ。

左舷側海面に発射炎が閃き、敵の艦影が瞬間的に
浮かび上がった。

「砲術より艦橋。敵は戦艦二！ 金剛型！」

ヘイズ砲術長の叫び声に、敵弾の飛翔音が重なる。

「第一〇四、一〇五駆逐隊、突撃せよ！」

「目標、左舷正横の敵戦艦。第五巡洋艦戦隊、星弾撃て！」

ループは、二つの命令を続けざまに発した。

「ヘレナ」の左舷側に発射炎が閃き、砲声が甲板上を駆け抜けた。

各砲塔一門ずつ、合計五門の一五・二センチ主砲が、星弾を放ったのだ。

直後、敵弾が轟音と共に飛来した。

飛翔音が「ヘレナ」の頭上を通過し、右舷側の海面に巨大な水柱が奔騰すると共に、敵弾炸裂の爆炎が湧き出した。

敵戦艦の射弾のうち、一発がサンティアゴ島の海岸に、他は「ヘレナ」の右舷側海面に、それぞれ落下したのだ。

「『ボイス』の右舷側に弾着！」

「DDG104、105、突撃します！」

後部見張員とレーダーマンの報告が、前後して届

いた。

数秒後、左舷側の空に橙色の光源が多数出現し、おぼろげな光が敵の艦影を浮かび上がらせた。

双眼鏡だけでは、艦型の識別は難しいが、中央に塔のような艦橋がそそり立つ様が見て取れる。

仏塔を想起させるため、合衆国海軍では「パゴダ・マスト」と呼ばれる、日本戦艦に特有の艦橋だ。

先にヘイズが報告した、コンゴウ・タイプに間違いなかった。

コンゴウ・タイプの艦上に、新たな発射炎が閃いた。星弾のそれとは比較にならない、強烈な閃光だ。ループも、大音声で下令した。

「目標、左舷側の敵戦艦。CD5、砲撃始め！」

3

「五戦隊より入電。『敵駆逐艦、貴方二向カフ。〇
ヒトフタロク
一二六（現地時間〇時二六分）』」

「読み通りだな」

中島親孝通信参謀の報告を受け、近藤信竹第二艦隊司令長官は白石万隆参謀長と領き合った。

「敵の狙いは、第二五軍のルソン上陸阻止にある。そのためには、足が速く、闇に紛れて行動しやすい駆逐艦を、船団に突っ込ませて来る可能性が高い」
近藤はそのように判断し、自身の直率戦隊である第四戦隊の「鳥海」「摩耶」、第四水雷戦隊の軽巡「那珂」、駆逐艦一二隻を、輸送船団の近くで待機させたのだ。

湾口付近では、閃光が繰り返し明滅し、「鳥海」の艦上に砲声が伝わって来る。

三戦隊の「金剛」「榛名」、五戦隊の「羽黒」「足柄」が、敵巡洋艦と砲火を交わしているのだろう。

「砲術より艦橋。敵駆逐艦、本艦の右六〇度、距離
一〇〇（二万メートル）！」

艦橋トップの射撃指揮所から、報告が上げられる。月齢一四の月明かりの下とあって、距離二万で目

標を視認したようだ。

「長官、砲戦距離の御指示願います」

白石の求めに、近藤は即答せず、「鳥海」艦長渡辺清七大佐の意見を求めた。

「艦長、どれぐらいで行ける？」

「本艦と『摩耶』であれば、八〇（八〇〇メートル）でやれると思います」

「よし、四戦隊は砲戦距離八〇。四水戦は六〇」

近藤は断を下した。

引きつけてから一斉に砲撃を浴びせた方が、より多くの敵駆逐艦を撃沈できるが、距離を詰められれば、雷撃を受ける恐れがある。

「鳥海」「摩耶」は、先行して砲撃すると決めた。

「鳥海」の通信室から、「四戦隊、砲戦距離八〇。」

四水戦、砲戦距離六〇」の命令電が飛ぶ。

「鳥海」の前甲板では、二〇・三センチ連装砲塔三基が右舷側に向けられ、六門の砲身が仰角をかけている。

後続する「摩耶」や、四水戦の各艦も同じだ。

「敵距離八〇！」

「四戦隊、砲撃始め！」

報告が入るや、近藤は大声で下令した。

既に照準を合わせていたのだから、ほとんど間を

置かずに、「鳥海」の右舷側に真っ赤な火焰がほと

ぼしり、砲声が夜気を震わせた。

発射の反動は、艦橋にも伝わって来る。下腹を突

き上げられるような衝撃だ。

後方からも砲声が伝わり、

「摩耶」撃ち方始めました！」

後部見張員が、僚艦の動きを報告する。

「鳥海」「摩耶」共に、各砲塔一門ずつの交互撃ち

方だ。二艦合計一〇発の二〇・三センチ砲弾が敵駆

逐艦へと飛翔する。

初弾命中を期待するが、直撃弾の爆炎はない。

敵駆逐艦も「鳥海」「摩耶」の発射炎を認めたで

あろうが、依然突撃を続けている。

「鳥海」「摩耶」が第二射を放つ。

この日二度目の砲声が轟く。各砲塔の二番砲から、

二艦合計一〇発の射弾が飛ぶが、全て闇の中に吸い

込まれるように消えただけだ。

「長官、照射射撃を使います」

「よかろう」

渡辺の具申を受け、近藤は即答した。

探照灯を照射すれば、命中率が上がる反面、そ

の艦は敵の集中砲火を浴びる危険がある。

だが、敵は小口径砲しか持たない駆逐艦だ。「鳥

海」が致命傷を受ける恐れは少ない。

「目標、右六〇度の敵艦。照射始め！」

渡辺が、大音声で下令した。

艦橋の後方から、九六式一〇センチ探照灯の白

い光が闇を貫いた。「鳥海」と敵艦の間に、白い光

の橋が渡されたかのようなだった。

数秒後、「鳥海」が第三射を放ち、「摩耶」も続い

た。

二艦合計一〇発の二〇・三センチ砲弾が飛び、探照灯の光芒こうぼうの中に、奔騰する水柱が浮かび上がった。水柱が崩れたとき、敵艦が湧き立つ黒煙に包まれている様が見えた。

「よし！」

近藤は、右手の拳こぶしを打ち振った。

「鳥海」と「摩耶」のどちらか、あるいはその両方が直撃弾を得たのかどうかは不明だが、第四戦隊は探照灯の点灯後、最初の砲撃で直撃弾を得たのだ。探照灯が旋回し、新たな目標が光の中に浮かび上がる。

「鳥海」が新目標への第一射を放ち、「摩耶」も続く。「鳥海」の周囲にも、敵弾落下の飛沫しぶきが噴き上がり始めた。

敵駆逐艦が探照灯の光源を目標に、砲撃を開始したのだ。

早くも、一発が命中したらしい。艦の後部から、炸裂音と衝撃が伝わって来る。

新目標——敵二番艦の周囲に弾着の水柱が噴き上がった直後、「鳥海」の後方から、太鼓たいこを乱打するような砲声が届いた。

「『那珂』撃ち方始めました。続いて駆逐艦、撃ち方始めました！」

後部見張員が、状況を報告する。

四水戦司令官の西村祥治少将は、敵との距離が六〇〇〇メートルまで詰まったと判断し、砲撃に踏み切ったのだ。

「敵二番艦、火災！ 速力低下！」

「照射目標を二番艦に変更！」
砲術長外山稔中佐の報告を受け、渡辺が下令する。

「鳥海」の探照灯が、新目標を照らし出す。

この直前まで、照射していた敵二番艦は、炎を背負ったような有様ありさまになり、海上に姿を浮かび上がらせている。

敵三番艦の周囲に、多数の飛沫が上がる。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。